

## 今週のメニュー

## ■トピックス

◇PVC News No. 78を発行しました

塩化ビニル環境対策協議会

## ■随想

◇インテリア紀行 (No. 8)

ーゴシック建築の華・ステンドグラス物語【後篇】ー

インテリア文化研究所 代表 本田 榮二

## ■編集後記

## ■トピックス

◇PVC News No. 78を発行しました

塩化ビニル環境対策協議会

9月15日に塩化ビニル環境対策協議会(JPEC)は[PVC News No.78](#)を発行しました。今号は特集で、塩ビ業界では初めて行われた「塩ビものづくりコンテスト2011」の表彰式と東京・名古屋・大阪で開催した受賞作品の展示会を紹介しました。

視点・有識者に聞くのコーナーでは朝日新聞社の編集委員の高橋真理子さんに「科学ジャーナリズムのいま」について語って頂きました。

No. 78の構成は以下の通りです。

## ○特集

塩ビものづくりコンテスト2011

表彰式レポート・展示会レポート

## ○トップニュース

塩ビ管の横笛で「合同演奏者数」のギネス記録に挑戦

震災復興への願いを込めて、弘前城址に鳴り渡った「ねふた囃子」の大合奏

## ○視点・有識者に聞く

科学ジャーナリズムの「いま」

朝日新聞社 編集委員 高橋 真理子 氏

## ○リサイクルの現場から

塩ビ管リサイクルの中間処理会社(株)グローバルテクノス

川崎市管工事業協同組合との連携で着実な成果。

## ○インフォメーション

塩ビ管の寝床でヤマネがぐうぐう。「塩ビ木製巣箱」に注目

丈夫で軽量、運搬メンテナンスも楽々。ヤマネの生態観察に福音をもたらした意外なアイデアとはー

## ○塩ビ最前線

地下スペースを生かし切る！金森化学工業(株)の「スマートフォーム」

二重壁工法を超える塩ビ製打込式型枠。軽くて丈夫で、工期も手間も大幅削減

○広報だより

「下水道展 '11 東京」で塩ビ管の耐久性など PR／塩化ビニル管・継手協会  
中1「プラスチック授業用」のワークノートが完成

掲載記事をいくつかご紹介いたします。

「トップニュース」は、弘前城で行われた横笛ギネスへの挑戦をとりあげました。

塩ビ管などで作った様々な種類の横笛を持った人々が、弘前城のコミュニケーション広場で一斉にねふた囃子を演奏し、その演奏者数をギネス記録として認定してもらう挑戦です。挑戦当日は北東北の弘前といえども 30 度を超す猛暑日で日陰を探して人が集まっていた。目標とした 4000 人にはわずかに届きませんでした。3742 人ものが参加し世界新記録としてギネスに登録されました。

ギネス記録の認定は「ギネス・ワールド・レコード社」の認定員が来日し行っていました。

「有識者に聞く」は、朝日新聞社の高橋真理子さんに『科学ジャーナリズムの「いま』』と題しお話を伺いました。

科学報道の記者として震災での原発報道のジャーナリズム姿勢や、WEB における情報発信力の広がりや若者が新聞をなかなか読まない状況の苦悩。さらに、子供たちに新聞を読む習慣を身につけてもらうため、週二回の朝刊の科学面の掲載では大きなイラストなどを使ってわかりやすく、親子でも楽しめるような紙面を作る取り組みをされていることなど丁寧にお話しして頂きました。

「インフォメーション」は、塩ビ木製巣箱と「やまね」について紹介しています。

森の妖精の「やまね」たちはとても小さく、おとなしい動物です。その「やまね」の生態観察に塩ビ管と木材を組み合わせた塩ビ木製巣箱が使われています。

なぜ「やまね」が塩ビ管の巣箱がいいのか不思議でした。「やまね」が塩ビ管の巣箱に入るのはカラスなどの外敵より攻撃を避けられるためです。木製の巣箱だとカラスなどのくちばしで穴が開いて攻撃を避けられないケースもあるからだそうです。一方、人間にとっては様々な動物の生態を観察する上で、木製の巣箱より塩ビ管の巣箱の方が軽量でかさばらず大量に運べるというメリットがあります。

山の中にはたくさんの塩ビ木製巣箱があり、研究員の方々は毎日多くの巣箱をひとつひとつ開けて中を確認しているそうです。ひたむきなご努力と開けた瞬間に何が棲んでいるのかわからない恐怖と戦う姿には感激しました。塩ビ管を通しての人間と「やまね」のつながりを紹介しました。

是非ご覧下さい。

『PVCニュース』は [JPECのホームページ](#) から、最新号、バックナンバー共にご覧頂けます。

ご講読を希望される方は、下記メールアドレスまで、送付先・TEL・希望部数などをご連絡下さい。

[info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)

## ◇インテリア紀行 (No.8)

ーゴシック建築の華・ステンドグラス物語【後篇】ー

インテリア文化研究所 代表 本田 榮二

### (五) ルネッサンス期のステンドグラス

14世紀後半より都市経済が活発化する。欧州各地に自治都市が興り、経済が活発化し人口も増大する。当然、都市経済の興隆は人々の価値観や生活文化に大きな影響を及ぼさざるを得ない。そして15世紀に入ると中世を支配した原理主義的キリスト教からの解放が叫ばれ、人間的な芸術表現を追及していく。建築物も天に届かんばかりの大聖堂建築から、フィレンツェのメディチ邸<sup>(写真1)</sup>に象徴される生活重視の建築に替わっていく。そして絵画も人間を感じさせる力強い描写が重視されるようになる。これが「ルネッサンス」と呼ばれるムーブメントである。

ルネッサンス絵画の特徴としては、レオナルド・ダ・ヴィンチの『モナ・リザ』<sup>(写真2)</sup>に象徴される「遠近法」と「明暗法」の重視が特徴である。これらの手法は、現在に至るまで美術の基本原則として受け継がれていく。たとえば現在でも美術学校の生徒が基本実技として行う、トルソーを黒鉛筆でスケッチする基本演習が典型例である。

この遠近法と明暗法が、美術を暗黒の中世から解放し芸術レベルへ引き上げたことは間違いない。しかし反面、衰退の運命に追い込まれたのが、ルネッサンス以降のステンドグラスの歴史と言っても過言ではない。絵画の模倣と化したステンドグラスは、着色ガラスの本質である透明性を失ってしまう。さらに七宝釉薬<sup>しっぽうゆうやく</sup>のエマイユを多用することにより質を低下させてしまう。これに拍車を掛けたのが写実的手法を重視するフランドル絵画の影響である。加えて「貧すれば鈍する」で、カトリックとプロテスタントの宗教戦争や暴動に巻き込まれたりするうちに、ステンドグラスは本来の活力を失い、暗く長いトンネルに突入していく。

### (六) 現代のステンドグラス

トンネルを抜け出すのは産業革命後である。まず英国ではラファエロ前派の芸術家や、その影響を受けたウィリアム・モリスなどがステンドグラスに挑戦する。ステンドグラスにとって産業革命による機械化と大量生産は最悪であった。この機械化を人間性喪失として嫌ったモリスは、中世のギルド社会の職人のように手仕事による商品づくりを追求する。

20世紀のモダンアートの到来は、有名画家を参画させたという点でステンドグラスの歴史に一つの契機をもたらした。その代表としてアンリ・マチスの作品を紹介しよう。太陽が眩しいコートダジュールのヴァンス村にドミニコ会の小さな教会が建っている。この南フランスの陽光と青い空に映える白い建物が「マチスの礼拝堂」とも呼ばれるロゼール礼拝堂だ。1941年、71歳のマチスは重病のためにリヨンで手術を受けた。その時に



(写真1)  
フィレンツェの  
メディチ邸 (著者撮影)



(写真2)  
レオナルド・ダ・ヴィンチ  
『モナ・リザ』

夜を徹しての看護で肉体的・精神的に消耗のどん底に居たマチスを救ってくれたのが看護婦モニクである。数年後、マチスはヴァンスの村で修道院の尼僧になっていたモニクと偶然再会する。彼女が礼拝堂設立の仕事を担当していることを知ったマチスは助力を惜しまず全身全霊を込め礼拝堂建設に取り組んでいく。

ところでカトリック教会には、どうしても「ローソクに灯されたほの暗い空間」というイメージが伴う。だが、ここは明るく純白な異次元の世界が広がっている。例えばステンドグラス<sup>(写真3)</sup>は、太陽と神の光を表わすレモンイエロー、生命を象徴するグリーン、地中海の空のウルトラマリーンブルーの三色で構成され、マチスの下絵を基にステンドグラス作家のポニー・ポールが製作を担当した。ステンドグラスを通して差し込む穏やかな光が、天井も壁も床も白一色の空間に色彩の揺らめきを与えている。まさに「色彩の魔術師」と呼ばれたマチスの面目躍如たるものがある。



(写真3)

#### ロゼール礼拝堂の内部

(著者撮影)

もちろんマチス以外にもステンドグラスの製作に打ち込んだ巨匠は何人も居る。建築家ではあるが、ロンシャン礼拝堂を設計したル・コルビジエ。この礼拝堂も見事なぐらいに神秘的空間の演出に成功し、現在では建築家志向の若者達の聖地となっている。或いはアッスイ礼拝堂やランス大聖堂、聖シュテファン教会のステンドグラス<sup>(写真4)</sup>を製作したマルク・シャガール。ここには聖書を題材にしたシャガール独特の幻想的な世界が広がり、訪れた人を沈黙させてしまう。筆者も毎年1月にフランクフルトで開催されるハイムテキスタイルを訪問した際には、可能な限りマインツの聖シュテファン教会を訪ね静寂の世界に身をゆだねている。毎回そうだが、日本に帰国して1ヶ月間はシャガール・ブルーが脳裏に焼き付いて離れない。これ以外にもルオーやブラック等がステンドグラスの下絵を描いているが、紙面の関係で割愛したい。



(写真4)

#### 聖シュテファン教会の内部

(著者撮影)

(この項 完)

前回：[インテリア紀行 \(No.7\) -ゴシック建築の華・ステンドグラス物語【中篇】-](#)

## ■ 編集後記

9月末でいよいよ定年を迎えます。その前に今までの経験・知識を試そうと思い、7月のeco検定(環境社会検定)試験を受けました。2万人以上の受験者(殆どが若者)と一緒に、昔の大学受験と会社での資格試験を思い出しながら久しぶりの緊張感を味わいましたが、その合格通知が先週届いてホットしているところです(合格率64.1%との事)。

また、先日ゴルフ検(ゴルフの知識検定試験)なるものも実施されているとの記事を見かけました。次は、母校(高校時代)のモットーであった文武両道を目指して、40年もの経験を活かしてゴルフ検にチャレンジしてみようかなと思っています。

来月以降も編集委員を継続する予定です。引き続きメルマガへの皆様のご支援とご意見を宜しくお願い致します。(薩弘)

## ■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)